



# 若者へのメッセージ 43

将棋 女流七段・日本将棋連盟常務理事 清水 市代

## 【第二回】「一瞬」を大切に

14歳で将棋界に飛び込んだ私は、16歳で念願になってプロ試験に合格。女流棋士という勝負師人生が始まった。

皆より遅くスタートしたため、同じ修業をしていますが勝ち上がることなど夢のまた夢。どうすれば良いのか？ 突然、名案がひらめいた。

### 14歳で勝負の世界へ

職業柄（なかどうかはやや疑問ではあるが）、揮毫の依頼は存外多い。歴史に残る名勝負が繰り広げられた老舗旅館や由緒ある料亭には、今でも当時の対局写真などとともに先達の書が飾られており、訪れる方々に将棋の魅力や勝負のすさまじさ、盤上の浪漫を語りかけている。

将棋の格言や好きな言葉、座右の銘を書かれる方がほとんどだが、中には詰将棋や英語、イラストを描く方もおり、職人気質というか、個

性豊かな「将棋指し」の面目躍如たるところかもしれない。

全国各地で催されている将棋イベントの会場では、必ずと言って良いほど「サイン会」のエリアが設置されている。墨痕鮮やかな直筆揮毫は、いつの時代も変わらず人気を博しており、お客様の長い行列ができるほど。色紙や白扇に書かせていただくことがほとんどなのだが、中にはくるっと背中を向けたかと思うと、「この上着に書いてください。お願いします！」という強者もおり、書き直しのきかない緊張感と会



提供…日本将棋連盟

清水 市代（しみず・いちよ）

女流七段、公益社団法人日本将棋連盟常務理事。

昭和44年（1969）、東京都東村山市生まれ。昭和58年（83）、第15回女流アマ名人戦で優勝し、翌年、高柳敏夫名誉九段門下で女流育成会に入会。63年（87）第14期女流名人位戦で初タイトル獲得。平成8年（96）、女流初の四冠（女流名人・女流王将・女流王位・倉敷藤花）を達成。12年（2000）「クイーン四冠」（女流名人、女流王位、倉敷藤花、女流王将）を達成。タイトル獲得数は合計43期（歴代2位）。28年（16）通算600勝達成。令和2年（20）史上初の女流七段となる。

平成29年（17）、日本将棋連盟常務理事に就任。

著書に『清水市代の囲いのエッセンス』『天辺』（毎日コミュニケーションズ）、『清水市代の将棋トレーニング』（NHK出版）

場のどよめきに包まれる中、勝負師らしく、いついかなる場合もボーカルフュイス、という鉄則を守りながら筆を走らせる（が、内心はドキドキである）。

将棋界には、いまなお師弟制度があり、14歳で弟子入りした私は、16歳のとき、念願かなってプロ試験に合格。この日から女流棋士という勝負師人生が始まった。

デビュー当時の揮毫は「一瞬」。二度とは来ない、今この瞬間を大切にしたい。一瞬、一瞬を全力で。という思いを込めて、一枚一枚、時間をかけて筆を運んでいた。夢への扉を開けたばかりの、弾けるような初々しさがあふれ、中には勢い余って筆先が色紙から飛び出してしまいうこともあったりして……。将棋界への強い憧れと自分自身への期待、怖いもの知らずの自信がみなぎる決意表明のような揮毫でもあった。今振り返ると、あの頃はスピード感あふれる毎日を常に全力で走り続けていた感がある。何事にも全力投球。いつでも120%。

## 上達のための名案?!

勝者は報われ、敗者は忘れ去られる。結果がすべての勝負の世界。一心不乱に頂点を目指し、強くなること、勝つことしか頭になく、それ以外のことはすべて無駄!と言わんばかりの勢い

で突き進んでいたあの頃。「寝食を忘れ」という言葉があるが、まさにその通りの毎日で、将棋のことしか頭になかった。1分1秒が惜しかった。他のことを考える時間など必要ないとさえ思っていた。

14歳で弟子入りという、皆より遅いスタートの私が追い付き追い越すためには、皆と同じ修業をしていたのでは到底足元にも及ばない。勝ち上がっていくことなど、夢のまた夢である。一日24時間の中から、少しでも多くの研究時間を捻出するにはどうすれば良いのか?と考えたとき、簡単な方法があるじゃないか、と突然ひらめいた。それは睡眠時間を「拝借」すること。そのときは、「我ながら名案!」と思ったものである。

早速実行に移すと、いつもよりたくさん棋譜を研究できるし、詰将棋も解ける、定跡もあれもこれもと欲張るうちに、どんどんテンションは上がり続け……。結果、駒を手にしたままバタリ、と倒れることになる。

若気わかげの至りとはまさにこのこと。眠る時間を削り過ぎて、人としての限界を超えてしまったようだ。過ぎたるはなお及ばざるが如し。

今思えば、何て無茶なことを、と呆れもするが、当時はそれほどまでに、強くなること、技術ぎじゆつを身に付けること、目指す頂点に少しでも近

づくことに必死であった。タイトルを獲得という目標に向かって、がむしゃらに突き進んでいたあの頃があったの今である。懐かしい思い出もあり、ちょっとびりうらやましいとさえ思ふ。なぜなら、今の自分には到底真似まねできないことであり、そんな向こう見ずはもう許されないことだから。

改めて、当時の自分に、「よくぞ頑張った、ありがとう」と感謝の思いでいっぱいである。ただし、周りの皆さんに心配を掛け通したことは、反省とお詫わづらひびしかございません。

## 女性初の常勤理事に

この世界に飛び込んでから、師匠をはじめとする皆様に、さまざまなことからいつも守ってもらっていた自分が、まさか守る立場のお役に就くことになるうとは、当時の誰も考えていなかっただろう。もちろん自分自身でさえも想像していなかった。日本将棋連盟の長い歴史の中で、執行権を持つ常勤理事に女性が選出されたのは初めてのことであり、現在は日々、常務理事としての公務に励んでいる。そうそう昔のような無茶はできない（のは残念）。

将棋界が注目を集めている今こそ初心に帰り、「一瞬」を大切に組み組んでいきたい。